様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月　 ７ 日現在

機関番号：８２４０６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１３４９８

研究課題名（和文）孤独死防止へ向けての高齢者の心理特性に着目したアセスメント・ツールの開発

研究課題名（英文）Development of the psychological characteristics of the elderly scale to prevent solitary death

研究代表者
山崎　久美子（YAMAZAKI, KUMIKO）

防衛医科大学校（医学教育部医学科進学課程及び専門課程、動物実験施設、共同利用研究施設、病院並びに防衛・その他・准教授

研究者番号：３０２００６５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　文献研究とインタビューによって作成された「孤独死のリスクのある一人暮らし高齢者の心理行動特性」24項目と妥当性を検討する「被援助志向性尺度（田村他，2001）」11項目の質問への回答に欠損値がある44通を除く258通（計516名）を対象に因子分析を行った結果、4因子14項目が抽出された。第1因子を「他者と人間関係を築ける力」因子（6項目）、第2因子を「他者からの支援を信頼する力」因子（4項目）、第3因子を「他者に対する警戒心」因子（2項目）、第4因子を「他者からの自立心」因子(2項目）と命名した。尺度の信頼性と妥当性を検討したところ、尺度の内的整合性は高く、また、尺度の妥当性が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　超高齢化社会を迎え、孤独死者数が増加し、孤独死防止へ向けた対策は緊急課題となっている。実際の方策の格は、地域住民による見守り支援であるが、支援の指針やガイドラインは今のところない。「一人暮らし高齢者の他者とつながれる心理行動特性」を踏まえた見守り支援は、支援の効率化と効果に有効であり、本尺度は行政による孤独死対策のガイドライン策定に寄与できる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：In a super-aging society, the number of the lonely death of the elderly living alone is increasing. The present study aims to develop the psychological characteristics of the elderly living alone who can connect with others scale to prevent the solitary death and examine its reliability and validity. 24 items were extracted according to literature review and semi-structured interviews to assess the psychological characteristics of the elderly living alone.A 24-item questionnaire survey and Help-seeking Preference Scale (Tamura et al., 2001) were delivered to 538 civil welfare officers and 302 were collected. A factor analysis of 516 responses indicated four factors: Factor1:Skills to build relationships with others (6 items), Factor2: Trust in support from others (4 items), Factor3: Wariness against others(2 items) and Factor4: No need for support from others (2 items). Our scale has good reliability and validity.

研究分野：臨床心理学

キーワード：一人暮らし高齢者　孤独死　心理特性　尺度開発　見守り支援利用者　見守り支援者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

超高齢化社会の我が国では、65 歳以上の一人暮らし高齢者の増加は男女ともに顕著であり、「孤独死」への対応は緊急課題となっている。孤独死の増加を受けて厚生労働省は、行政の対応だけでは「孤立死」を減らせないうえに、死後に関わる経済的および人的負担やコストが大きいとし、予防的コミュニティーづくりを提言している。孤独死防止へ向けた対策は、地域、自治体、民間の取り組みによって行われており、実際の方策の核は、地域住民による見守り支援であるが、支援の指針やガイドラインの作成に役立つデータの蓄積は不十分である。孤独死のリスクのある一人暮らし高齢者の心理行動特性に焦点を当てた研究は行われておらず、見守り支援活動の効率化と効果を図るためには、支援を利用する高齢者の心理行動特性の把握が重要である。

２．研究の目的

孤独死に関する文献レビューとインタビュー調査を行い、見守り支援活動を促進（または阻害）する孤独死のリスクのある一人暮らし高齢者の心理行動特性を抽出し、アメスメント項目を作成する。一人暮らし高齢者が「孤立」の末、「孤独死」に陥ることのないよう、高齢者当人の「他者とつながれる特性」を測定する尺度を開発し、あわせて信頼性と妥当性を検討する。

３．研究の方法

(1) 「高齢者の孤独死（あるいは孤立死）に関する研究」を抽出するにあたり、孤独死（あるいは孤立死）に関する文献を各種データベース（医学中央雑誌 Web 版 ver.5, CiNii, Medline, CiNahl）にて検索する。さらに、尺度開発のための項目をプールする目的で、所属機関の倫理審査委員会の承認を得た後、研究の趣旨を説明の上、立候補制で募った見守り支援者 6 名（男性 4 名、女性 2 名）と見守り支援利用者 8 名（男性 3 名、女性 5 名）を対象に「見守り支援受け入れ／拒否」に関連する心理行動特性について、インタビューガイドに基づき、インタビュー（半構造化面接）を実施する。

(2) 「高齢者の他者とつながれる特性測定尺度」を開発するために、倫理委員会の承認を得た後、研究の趣旨に賛同を得られた 5 つの市及び区の民生委員 538 名を対象にアンケート調査票を配付し、有効票を抽出の上、尺度開発を行い、信頼性と妥当性を検討する。見守り支援利用者をアンケート調査の対象としなかった理由としては、①見守り支援の対象である超高齢者の回答については、回答自体に妥当性の問題があり、②超高齢者の自己評価に際しての心理的負担への配慮が必要であり、かつ、③民生委員歴が 1 年以上の者であれば、見守り支援者が見守り支援利用者の心理行動特性を評価できるという民生委員理事会からの示唆を得たという 3 点である。

４．研究成果

(1) 医学中央雑誌 Web 版 ver.5 を用い、キーワードを「孤独死」「高齢者」として検索したところ 30 件がヒットし、「孤立死」「高齢者」として検索すると 46 件がヒットした。次に、CiNii を用い、同様に検索したところ「孤独死」「高齢者」では 128 件、「孤立死」「高齢者」では 42 件がヒットした。さらに、Medline、CiNahl ではともに、キーワードを「solitary death」「elderly or aged or older or elder or geriatric」として検索したところ 11 件がヒットした。延べ 257 件のうち、原著論文は計 10 件で、カテゴリー別に分けると、孤独死予防への取り組みや社会的支援に関する論文 4 件、孤独死の現状や背景について言及した論文 3 件、法医学的調査研究 2 件、孤独死高齢者の特性について考察した論文 1 件であった。

(2) 「孤独死」には合意された定義はなく、さまざまな定義の存在から、概念の多義性と現象の多層性が窺われ、孤独死（あるいは孤立死）を構成する主要な要素という点において、いまだ決着していない。定義についての言及がある 17 件を整理したところ、「自宅（自室内、住居内）での死亡：5／17 件」「看取りなし：11／17 件」「一人暮らし：4／17 件」「社会的孤立：4／17 件」「自殺の有無：2／17 件」「死後しばらくの放置（相当期間発見されない）：7／17 件」「高齢者：2／17 件」がリストされ、「孤独死」の定義の多様化と事象の捉え方の多様性が指摘できた。

(3) 10 件の原著論文を検討したところ、「見守り支援の受入れ／拒否」に関連する心理行動特性として、舛田ら（2011）は「見守りの拒否や無関心」「近隣住民の関係性の希薄」「近所付き合いへの負担感」「プライバシー意識の高まりによる情報共有の困難」を、福川ら（2011）は「支援や関わりの拒否」を、野尻（2015）は「個の自立」を挙げていた。

(4) インタビューに基づくデータから最終的に延べ 151 のカテゴリーが得られた。その結果、「支援受け入れに関連する心理行動特性」も 5 つのコアカテゴリーに、また、「支援拒否に関連する心理行動特性」も 5 つのコアカテゴリーにまとめられた。前者については、「人間関係形成力（新しい人間関係を築ける力）」「受援力（支援を受け入れ活用する力）」「コミュニケーション力（相手に敬意を払い対話をする力）」「他人を信頼する力」「老人力（老いてなお前向きに生きる力）」と表される上位概念に、後者については、「自立願望」「対人関係回避」「心理的不安定」「人間不信」「内向性」と表される上位概念にまとめられた。

(5) 回収された 302 通（回収率：56.1%）の調査票のうち、心理行動特性 24 項目と妥当性を検討する「被援助志向性尺度（Help-seeking Preference Scale, 以下 HPS）（田村・他, 2011）」の 11 項目への回答に欠損値があった 44 通を除いた 258 通（有効回答率：85.4%）（男性 258 名、女性 258 名の計 516 名）を対象に、統計ソフト SPSSver.25 を用い、解析を行った。想定した一人暮らし高齢者の心理行動特性に関する 24 項目の探索的因子分析を行ったところ 7 因子が抽出された。最初に、24 項目中 2 項目は 6 因子までの因子負荷量がすべて小さかったので除き、次

に 24 項目中 3 項目は別の 1 項目と相関が低く、24 項目中 1 項目は別の 1 項目と相関が高かったので除き、6 項目については高齢者の心情を配慮するための要配慮項目 and/or 構成概念がネガティブであるという理由で削除した。その結果 4 因子 14 項目が抽出された。下位因子に含まれる項目内容より、第 1 因子を「他者と人間関係を築ける力」因子、第 2 因子を「他者からの支援を信頼する力」因子、第 3 因子を「他者に対する警戒心」因子、第 4 因子を「他者からの自立心」因子と命名した。また検証的因子分析により尺度の適合度が RMSEA=.07 のように高いことを確認した。さらに、下位尺度の信頼性を検討するために Cronbach のα係数を算出した結果、「他者と人間関係を築ける力」因子でα＝.86、「他者からの支援を信頼する力」因子でα＝.78、「他者に対する警戒心」因子でα ＝ .67、「他者からの自立心」因子でα ＝ .75 となり、内的整合性は高いものと判断した。続いて、下位尺度の基準関連妥当性を検討するために 2 因子から成る HPS を外的基準として各尺度間の相関係数を算出した結果、HPS の 2 因子（「第 1 因子：援助の欲求と態度」「第 2 因子：援助関係に対する抵抗感の低さ」）と本尺度の 4 因子間では、本尺度の第 1 因子および第 2 因子と HPS の第 1 因子および第 2 因子の間に正の相関、本尺度の第 4 因子と HPS の第 1 因子および第 2 因子間に負の相関、本尺度の第 3 因子と HPS の第 1 因子と第 2 因子間では、前者が無相関、後者が低い相関を示し、開発された本尺度の基準関連妥当性が確認された。

Table. 1　尺度項目

第 1 因子「他者と人間関係を築ける力」
他人と心を割って話せる 他人との関わりを大切にしている 他人と親密になれる 他人と気軽に話せる 自分の意思を伝えることができる 自分から進んで友達を作れる
第 2 因子「他者からの支援を信頼する力」
他人の援助を受け入れることができる 頼れる他人がいると思っている 自分の生活や人生を他人に話せる 誰かが自分を助けてくれると思っている
第 3 因子「他者に対する警戒心」
他人に話して裏切られることがあると思っている 他人を信用しないほうが安全と思っている
第 4 因子「他者からの自立心」
自分は他人の助けがなくても大丈夫と思っている 自分は助けを必要としていないと思っている

＜引用・参考文献＞

① 福川康之、川口一美、孤独死の発生ならびに予防対策の実施状況に関する全国自治体調査、日本公衆衛生雑誌、58 巻 11 号、2011、959－966
② 入井俊昭、岩楯公晴、青木 清、法医剖検例調査に基づく独居死と精神疾患の関連、心身健康科学、9 巻 2 号、2013、96－102
③ 舛田ゆづり、田高悦子、臺　有桂、糸井和佳、田口理恵、河原智江、住民組織からみた都市部の孤独死予防に向けた見守り活動におけるジレンマと方略に関する記述的研究、日本公衆衛生雑誌、58 巻 12 号、2011、1040－1048
④ 松宮 朝、高齢者の「関係性の貧困」と「孤独死」・「孤立死」、日本都市社会学会年報、30 巻、2012、15－28
⑤ 森田沙斗武、西 克治、古川智之、一杉正仁、高齢者孤立死の現状と背景についての検討、日本交通科学学会誌、15 巻 3 号、2016、38－43
⑥ 野尻雅美、高齢者の孤独死と孤立死と満足死：「一人」と「ひとり」からの考察、日本健康医学会雑誌、24 巻 2 号、2015、99－102
⑦ 斉藤雅茂、近藤克則、尾島俊之、平井 寛、健康指標との関連からみた高齢者の社会的孤立基準の検討－10 年間の AGES コホートより、日本公衆衛生雑誌、62 巻 3 号、2015、95－105
⑧ 田村修一、石隈利紀、指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究－バーンアウトとの関連に焦点をあてて、教育心理学研究、49 巻 4 号、2001、438－448
⑨ 田中英樹、中野いく子、高橋信幸、孤立死を防ぎ、社会的孤立をいかに解消するか－コミュニティソーシャルワーク実践のあり方に関する研究、社会福祉学、56 巻 2 号、2015、101－112
⑩ 田中博子、森實詩乃、団地自治会による高齢者の孤独死予防の取り組みに関する一考察、日本地域看護学会誌、19 巻 1 号、2016、48－54
⑪ 山崎健太郎、羽田俊裕、水野 大、倉田理華、塩原理沙、外川加奈子、和賀望浩、渡辺ゆみ子、梅津和夫、死後長時間経過事例にみる孤独死の疫学的考察－同居家族が居る場合、法医学の実際と研究、58 巻、2015、223－229

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 山崎久美子，逸見　功	４．巻 41
２．論文標題 孤独死防止へ向けた見守り支援受け入れ／拒否に関する一人暮らし高齢者の心理特性と検討	５．発行年 2018年
３．雑誌名 防衛医科大学校進学課程研究紀要	６．最初と最後の頁 59，74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山崎久美子，逸見 功	４．巻 32（1）
２．論文標題 孤独死研究の動向と今後の課題	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本保健医療行動科学会雑誌	６．最初と最後の頁 66，73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山崎久美子，逸見　功
２．発表標題 孤独死防止へ向けた高齢者の心理特性ー見守り支援の受け容れ／拒否に関連する10の特性
３．学会等名 第33回日本ストレス学会学術総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 山崎久美子，逸見　功
２．発表標題 孤独死防止へ向けた高齢者の心理特性に関する研究ー見守り支援利用者からみた見守り支援拒否に関連する高齢者の心理特性
３．学会等名 日本カウンセリング学会第50回記念大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 山崎久美子，逸見　功
２．発表標題 孤独死防止へ向けた高齢者の心理特性に関する研究ー見守り支援利用者が語る自身のポジティブな特性
３．学会等名 日本健康心理学会第30回記念大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 山崎久美子，逸見　功
２．発表標題 孤独死防止へ向けた高齢者の心理特性に関する研究ー見守り相談員からみた見守り支援拒否に関連する高齢者の心理特性
３．学会等名 日本心理学会第81回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 山崎久美子，逸見 功
２．発表標題 孤独死防止へ向けた高齢者の心理特性に関する研究ー見守り相談員からみた見守り支援利用者のポジティブな特性
３．学会等名 第32回日本保健医療行動科学会学術大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	逸見　功 (HEMMI Isao) (50173563)	日本赤十字看護大学・看護学部・教授 (32693)	